



立教大学

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
TEL 03-3985-4967 FAX 03-3985-2850

総長室社会連携教育課

Email : shakairenkei@rikkyo.ac.jp
2021年3月発行



共に生きる

—立教大学・東日本大震災後の10年

はじめに

2011年3月11日の東日本大震災および大津波による原子力発電所の事故発生から10年が経過しました。この冊子は立教大学の2011～2020年、特に2014年以降の活動報告です。

東日本大震災は、未曾有の社会的・経済的打撃を与え、多くの方の命を一瞬にして奪い去りました。本学では、発災後すぐに「東日本大震災復興支援本部（現・東日本大震災及び災害対策・支援本部）」を立ち上げ、「東日本大震災に伴う立教大学の復興支援活動指針」を策定し、全学的な連携・協力の下、被災地の復興支援活動を組織的に開始しました。その後、支援活動を通して繋がった地域住民の方々との交流や、地域から学び、地域課題に取り組む活動などへと幅を広げ、2017年には岩手県陸前高田市協力のもと岩手大学とともに交流活動拠点「陸前高田グローバルキャンパス」を開設し、現在に至っています。これからも本学が大切にしている「共に生きる」気持ちを、被災地域の方々と共に復興の道を歩むことで形にしていきたいと考えています。

立教大学の10年間の活動はたくさんの方からご支援、ご協力をいただきました。活動を支えてくださった多くの方に、感謝を込めてこの冊子をお届けします。



CONTENTS

活動一覧 (2011～2020) ④

交流する ⑧

- ・コミュニティ福祉学部
東日本大震災復興支援プロジェクト
- ・社会学部 東日本大震災RDY（立教生ができることをやるう）プロジェクト
- ・チャレン室
立教大学学生キリスト教団体 福島訪問
- ・立教野球教室@陸前高田
- ・立教バレーボール教室@陸前高田
- ・東京六大学バスケットボールリーグ戦
陸前高田大会

地域から学ぶ ⑭

- ・社会学部 震災のフィールドワーク
（生活支援・ライフストーリー・プロジェクト）
- ・陸前高田スタディツアー
- ・新入職員研修〈2年目〉
「陸前高田に赴く」

地域課題に取り組む ⑮

- ・グローバル教育センター 陸前高田プロジェクト
- ・異文化コミュニケーション学部
サービスラーニングC（イングリッシュ・キャンプ）
- ・立教サービスラーニング（RSL）
- ・社会学部 ICT教育の実践によるコミュニティ支援

交流と学びの場を開く —陸前高田サテライトの開設— ⑳

- ・教育
- ・研究
- ・地域貢献

学生の取り組み ㉔

- ・東日本大震災復興支援団体 Frontiers
- ・東日本大震災復興支援団体 Three-S
- ・復興支援交流スペース

メッセージ ㉒

- ・陸前高田市長
- ・東日本大震災及び災害対策・支援本部長
／陸前高田サテライト長

活動の歩み ㉘

データ ㉓

活動一覧 (2011~2020)

東北各地



2011.4~2021.3
コミュニティ福祉学部
東日本大震災
復興支援プロジェクト
 コミュニティ福祉学部
 石巻市、気仙沼市、いわき市、南三陸町、
 陸前高田市、新宿区、東久留米市



2014.3~継続中
石巻・女川交流プログラム
 東日本大震災復興支援団体
 Three-S



2011.5~継続中
社会学部 東日本大震災
RDY (立教生ができることを
やろう) プロジェクト
 社会学部
 石巻市、気仙沼市、陸前高田市



2013.4~継続中
唐桑ツアー
 東日本大震災復興支援団体
 Frontiers
 気仙沼市、陸前高田市



2012.8
釜石市復興ボランティア
および、釜石シーウェイブスや
地元中学生との交流
 体育会ラグビー部、学生部



2012.9~継続中
震災のフィールドワーク
(生活支援・ライフストーリー・
プロジェクト)
 社会学部
 ※2017年から自主講座および社会学部 東日本
 大震災 RDYプロジェクトに引き継がれる
 気仙沼市、陸前高田市、大槌町

2014.5
ワークショップ演習C:
山元町訪問ボランティア活動
 経営学部
 山元町



2012.11~継続中
福島訪問
 チャレン室・学生キリスト教団体
 「郡山プロジェクト」/池袋クリスマス実行委員会
 (2012~2015)
 「福島の子どもの笑顔をつくり」隊/立教学院諸
 聖徒礼拝堂ハンドベルクワイア (2015・2016) /
 学生キリスト教団体代表委員会 (2017・2018)
 「福島訪問」/学生キリスト教団体代表委員会
 (2019)
 郡山市、会津若松市、富岡町、新地町など



2014.2
復興支援プロジェクト/東北巡礼
キャラバン隊~よりそのための3日間~
 チャレン室

陸前高田



2011.5~6
陸前高田「炭の家」での
高齢者介護ボランティア
2011.12~2012.8
子ども支援ボランティア



2012.8
広田町仮設住宅での
盆踊り大会
2013.2
陸前高田市広田地区仮設住宅に
おける傾聴ボランティア
 ボランティアセンター



2011.8~2015.8
陸前高田支援ボランティア
 東日本大震災復興支援本部
 ※2015年は陸前高田スタディキャンプ



2011.12~継続中
職員ボランティア
 東日本大震災復興支援本部
 ※2014年11月から「新入職員研修〈2年目〉
 「陸前高田に赴く」(人事課)



2012.2
図書館再生支援ボランティア
 学校・社会教育講座司書課程



2012.5~2013.3
映像ビデオ『Rのこぼれ』制作
 現代心理学部、広報課



2012.7~継続中
立教野球教室@陸前高田
 体育会野球部、学生部



2012.11
英語ワークショップ
陸前高田英語ボランティア
by Small Group
Communication 有志
 経営学部



陸前高田



2012.11
図書館施設備品の寄贈
東日本大震災復興支援本部、
図書館



2013.6
陸前高田市立(仮設)図書館への
書架寄贈
東日本大震災復興支援本部、
学校・社会教育講座事務局、図書館



2013.6~2017.12
陸前高田スタディツアー
東日本大震災復興支援本部、
国際センター



2013.8~継続中
立教バレーボール教室
@陸前高田
体育会バレーボール部
体育会女子バレーボール部



2014.2~継続中
陸前高田プロジェクト
グローバル教育センター



2016.4~継続中
立教サービスマーケティング(RSL)
立教サービスマーケティングセンター
※陸前高田市以外でも実施



2017.4~継続中
陸前高田グローバルキャンパス
開設



2017.12~継続中
みんなでわいわいクリスマス
東日本大震災復興支援団体
Frontiers
Three-S



2018.3
岩手県陸前高田市総合交流センター
開設記念イベント
第14回東京六大学バスケット
ボールリーグ戦 陸前高田大会
立教大学、陸前高田サテライト共催



2018.8~2020
ICT教育の実践による
コミュニティ支援(寄附講座)
社会学部



2019.7~継続中
サービスマーケティングC
(イングリッシュ・キャンプ)
異文化コミュニケーション学部

立教大学および周辺地域



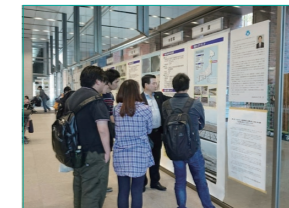
2011.3
帰宅困難者の受け入れ



2012.12~2016.12
「つながる。陸前高田と立教大学」
交流展
~東日本大震災を忘れないために
立教大学



2013.5~2016.7
「つながる。陸前高田と立教大学」
交流展
学内パネル展示
東日本大震災復興支援本部



2013.10~2015.12
「つながる。陸前高田と立教大学」
交流展
ホームカミングデー・パネル展
東日本大震災復興支援本部、校友会



2014.11~2017.12
たかたのゆめフェア
(陸前高田市ブランド米の
学食販売)
東日本大震災復興支援本部

交流する

Interact

コミュニティ福祉学部 東日本大震災復興支援プロジェクト

「いのちの尊厳のために」を学部の理念に掲げるコミュニティ福祉学部では、東日本大震災によって、多くの人の「いのちの尊厳」が危機に晒されていることを座視しているわけにはいかないと、2011年4月13日にプロジェクトの立ち上げを決定しました。学生と教員が一体となって、被災された方々を訪ね、被災地の復興を見守っていくという、細く長く寄り添う伴走型の交流支援活動を継続し、2020年度で活動を終了するまでに7拠点（気仙沼市・大島、陸前高田市、石巻市、南三陸町、いわき市、新宿区、東久留米市）へ計約300回、他学部生を含む延べ約3,650人の学生・教職員スタッフが現地活動に参加しました。

新宿交流プログラム

新宿区内都営アパートに避難してきた方々と地域住民との多世代交流の場を作るために複数の大学の学生が立ち上げた「Joy Study Project」と連携しました。



陸前高田交流プログラム



震災遺構や昔の写真を見ながら、その場に身を置き、そこにあった生活と変化を感じました。

気仙沼・大島交流プログラム

「身近な先輩」となり、子ども達の記憶に残る出合いを紡いできました。



いわき・檜葉交流プログラム

コミュニティ再形成を余儀なくされたいわき・檜葉で地域コミュニティを大切にすることに触れました。



南三陸交流プログラム

地元の方々が考案したコミュニティを紡ぎ直す仕組みを学びました。



石巻交流プログラム

震災前から交流のあった高齢者介護事業所の復興に寄り添いました。



東久留米交流プログラム

東久留米市及び近隣地域に自主避難してきた方々との相互交流を行いました。



参加学生の声

私が特に印象に残っている活動は、いわき・檜葉交流プログラムです。私はこれまで原発事故で被害を受けた地域を訪れたことがありませんでした。そのため、現在の町の様子を学び、今だからこそできることを考えるために参加をしました。とりわけ檜葉町の地域包括支援センターの職員の方との関わりが印象的でした。2019年2月、初めてプログラムに参加した際は町民の方と交流する機会がありませんでした。そのため、何らかの形で交流する機会を設けてほしいとお願いしたところ、大学や檜葉町の協力のもと、次のプログラムでは地域サロンやミニデイに参加する機会を設けてくださいました。このとき檜葉町の職員の方の真摯なご対応を肌で感じ、今後も何らかの形で関わりたいと思いました。そして、2020年にはゼミの活動として檜葉町とZOOMでの交流会を開催しました。今後は、この活動を継続させるための仕組みづくりが目標です。檜葉町とのつながりを大切にしていきたいと思っています。



コミュニティ福祉学部3年
齋藤優太さん



檜葉町の町民の方との交流会



地元の方々と一緒に「いただきます」

スタッフの声

2015年4月～2019年3月まで引率スタッフを務めました。南三陸町、気仙沼・大島、いわき・檜葉の3拠点を担当しました。拠点によって体制も違いましたが、現地コーディネーターや担当教員、学生達と話し合いをしながらプログラムを考えました。学びに行かせて頂く・お邪魔させて頂くというスタンスは大事にしていたので、常に学生たちに伝えていたと思います。あとは学生たちにプログラムを通して自ら考える力や主体性を身に付けてもらえたら良いなと思っていました。プログラムでの経験を得て、現地の方と一緒にまちづくりをしてみたいと思うようになり、2020年5月に気仙沼市に移住をしました。現在は「気仙沼まち大学運営協議会」の地域おこし協力隊として活動する傍ら、ブレイクダンスを通した身体表現の楽しさを発信する団体「KESENNUMA BREAKERS」を立ち上げて活動しています。また気仙沼のダンススクールにも所属をして、子ども向けのダンス教室をしています。

いわき26期。ごはんカフェきゅういちにて



気仙沼68期。中高生べんぎょう会にて

コミュニティ福祉学部復興支援推進室スタッフ
渡辺修司さん



社会学部 東日本大震災 RDY (立教生ができることをやろう) プロジェクト

東日本大震災を受け社会学部では、わたしたちができることを考えるためにプロジェクトを開始しました。2011年5月の初イベントに集まった学生達が立ち上げた学生団体と協力しながら、主に気仙沼市唐桑町や陸前高田市を訪れ、現地の人びとと出会い、一人ひとりの声に耳を傾けることを主軸とした活動を続けてきました。2013年には学部や大学院に関連科目を開講し、学生はこれらのコンテンツを組み合わせながら学びを深めています。2015年に地元の方からの依頼で作成した仮設住宅で暮らす人びとの聞き書き記録・小倉康嗣ゼミナール編『とまり木を生きぬく人びと〜唐桑・仮設住宅物語』は現地を訪れる人びとに今でも広く読まれています。代々築き、育まれてきた現地の人びとの関わり・交流の地道な積み重ねがあり、この継続的な活動の蓄積によって得られたものの意味や価値は、震災から時がたてばたつほど、学生にとっても、現地の人びとにとっても、このほか大きくなってきているのを感じます。2020年度からは、現地に行きつづけることの意味を問い、記憶の継承を行う正課科目として活動を継続していきます。



地元の方の案内でまちを歩きます



掘りこたつで民宿の女将さんと共に

参加学生の声

東北に赴き、東北の方々と対話するという。そこから見出される学びは、私の「被災地の現状を知りたい」という表面的な参加動機を大きく超えてくるものでした。「この震災とは何だったのか」というテーマを核として始まる双方向的なコミュニケーションのなかでの、言葉と感情の交流。そのなかで私は、震災を単なる凄惨な出来事としてではなく、いかに人の「生」が狂わされ、損なわれたのかという視座から捉え、広く深く思考できるようになっていきました。フィールドに赴き「会う」なかで、得られる気づきが本当に多くありました。また、同じフィールドに一度行って終わるのではなく、何度も繰り返し行くことにこの活動の大きな意義があったと思います。なぜならば、東北の方々と対話と関係性を積み上げていくなかで、自らの思考が繰り返し相対化され、更新されていくことをひしひしと感じたからです。この、妥協せず考え抜く姿勢は、今でも私の大切な基礎となっています。あたたかく私たちを迎えてくれた東北のみなさま、支えてくださった立教大学関係者のみなさまに、心からの感謝を申し上げます。「震災を知る」という地平にとどまらないこの活動が、いつまでも続いていくことを切に願います。



常宿にしている唐桑の民宿つなかにて思いがけない女将さんの深い話に聞き入る



津波で被災した米沢商会ビルで地元の方からお話を伺う



社会学部4年 三瓶湧大さん

米沢商会ビルの頂上から市内を望む

現地の方の声

東日本大震災10年目の節目によせて、まずはこれまでお寄せいただいた支援に対し衷心より厚く御礼申し上げます。御大学の学生諸君らが小さな幸せと優しき、笑顔を携えて、私達の荒んだ心に沃野（豊かな土地）を耕す力を注いでいただきました。そしてこの10年で最も記することは、仮設住宅暮らしの空白の数年間の聞き書き記録を残してくれた御大学の取り組みでした。私達子々孫々まで先祖がこうしたなかでも生き抜いたのだという、後世に伝える震災遺稿とも言ふべき記録を残してくれた。今こうして10年を迎えるにあたり、やっと震災前の光景を真摯に受け止めることができたこと。なにより潮騒の匂いを当たり前嗅げることができたこと。立教大学なくて語れない唐桑の復興の歩みと言っても過言でないことを、万謝の念をもって我が10年目の思いとして申し上げたい。

国昭さんが主宰する「カエル塾」にて共に学び、感じ、考える

カエル塾前で集合写真



唐桑町 馬場国昭さん



カエル塾の黒板に立教大学の名前が

※カエル塾は、東日本大震災後、唐桑町を訪れた多くの人々が集まり、馬場国昭さんと親交を深めた場所です。

チャプレン室

立教大学学生キリスト教団体 福島訪問

2011年11月に学生キリスト教団体の学生有志で郡山ベージェント隊を結成し活動を開始しました。2014年2月、チャプレン室は学生キリスト教団体と共に「復興支援プロジェクト 東北巡礼キャラバン隊〜よりそための3日間〜」を実施しました。2012年から2015年まで池袋クリスマス実行委員会が郡山プロジェクトとして、2015年・2016年には立教学院諸聖徒礼拝堂ハンドベルクワイアが「『福島の子どもの笑顔をつくり』隊」として、年に一度、福島の子どもたちと交流を深めました。2017年からは学生キリスト教団体を統括する代表委員会が活動を引き継ぎ、2019年には「立教大学学生キリスト教団体 福島訪問」として実施しています。子どもたちはもちろん、幼稚園の先生や帰還困難地域の『語り部』の方等とも交流し、お話を伺いながら、震災後の被災地の現在を知り、被災した方々や子どもたちの心に寄り添う活動を継続しています。



訪問先の幼稚園児たちと『パブリカ』をおどる



帰還困難地域(富岡町)にて『語り部』の方からお話をうかがう

立教野球教室

@陸前高田

子どもたちに支援の手が届きにくいという現地の声を受けて、2012年より陸前高田市内の小・中学生を対象とした野球教室を開催しています。東京六大学リーグや大学日本代表で活躍する選手による指導を真剣に受けている姿が印象的です。中学校時代にこの野球教室で立教大学の存在を知り、野球部に憧れて本学への進学を決めた学生もいます。



立教バレーボール教室

@陸前高田

陸前高田では男の子は野球、女の子はバレーボールが盛んであることを受けて、2013年より気仙地域の小学生チームを対象に開催しているプログラムです。大学生への質問タイムや保護者の皆様による流しそうめん昼食会など、実技指導や試合以外でも笑顔が絶えないプログラムです。



東京六大学バスケットボールリーグ戦

陸前高田大会

2018年3月、「夢アリーナたかた」開設記念イベントとして「東京六大学バスケットボールリーグ戦 陸前高田大会」を開催しました。本学バスケット部OBの声掛けで実現。地元の小・中・高校生向けの練習指導、交流試合、ダンクコンテストや車椅子バスケのイベントも併せて開催しました。東京六大学からは約110人、小・中・高校生は約150人が参加しました。



地域から学ぶ

Learn from the community

立教大学の学生・教職員は、東日本大震災という未曾有の大災害に遭遇した陸前高田市をはじめとする地域に赴き、そこで生きる方々、そこに集う方々から、多くことを教えていただいています。

社会学部 震災のフィールドワーク (生活支援・ライフストーリー・プロジェクト)

2012年に社会学部のゼミでの活動として開始し、2013年から正課科目になりました。東日本大震災という経験について、岩手県上閉伊郡大槌町、同県陸前高田市、宮城県気仙沼市唐桑町をフィールドワークし、被災した人びとや現地で活動をしている人たちと関係をつくりながら、その経験の語り＝ライフストーリーを聞きとります。そしてそれを、現地の人びとの支援につなげつつ、未来への経験的遺産としてアーカイブ化（過去の記憶を保存し将来の新たな生のあり方・社会のあり方を探る記録として蓄積）するとともに、履修者各自の問題意識を踏まえて報告書を作成し、現地の方々へお届けしています。2017年からは大槌町は学生の希望に基づき開講する自主講座として、陸前高田市と唐桑町は社会学部 東日本大震災RDYプロジェクトとして引き継がれ継続しています。



できることを
お手伝いしながら
地元の方と関係を
深めます



地元の方と
じっくり
向き合います

陸前高田スタディツアー

立教大学に在学する留学生と海外留学を予定している日本人学生による「陸前高田スタディツアー」を2013年度から2017年度にかけて実施しました。陸前高田市の復興状況を視察し、現地の方々と一緒に考えることで、被災地の現状と課題を認識するとともに、母国や留学先で自らの体験を伝え東日本大震災の風化を防ぐ一助とすることを目的として開催してきました。実際に目で見て体験すること、自分の考えや想いをしっかりと言葉にしてアウトプットすることの重要性を学びました。



See you
again!



復興最前線
ツアーに参加

新入職員研修〈2年目〉 「陸前高田に赴く」

震災直後から実施していた「職員ボランティア」の後継プログラムとして、立教学院入職2年目の職員を対象に実施している職員向け研修プログラムです。研修のテーマである「立教を知る」を根拠として、本学の基本理念である「共に生きる」ということを学ぶとともに、陸前高田市に生きる様々な背景や立場を持つ方々の仕事への向き合い方や生き方に触れることで、職員として本学でどのように働いていくのかについて深く考える機会とさせていただくことを目的に実施しています。

米沢商会
ビルにて
震災当日を
追体験



高台から
まちを望む

地域課題に取り組む

Work on regional issues

東日本大震災で被災した地域では復興に向けた課題に取り組んでいます。また、その多くの地域が、将来的に世界中が取り組むことになる課題を先取りしている課題先進地といわれる場所でもあります。立教大学では学部等の専門性を生かして学生が地域住民と共に地域課題に取り組むプログラムを実施しています。

グローバル教育センター 陸前高田プロジェクト

立教大学の国際化戦略「Rikkyo Global 24」の取り組みの1つとして、留学生を含む立教生が、被災地の現状を広く知り、復興における課題の共有と解決法の提案・実践を通じて陸前高田市の復興に寄与していくことを目的としてスタートしました。本プログラムの趣旨に賛同したスタンフォード大学が2015年から学生の派遣を開始、のちに香港大学、シンガポール国立大学も加わり4大学の協働が始まり現在に至っています。被災や復興の状況を自身の体験として知るとともに、陸前高田市の地域課題に向き合う全学部生対象の課題基盤型プログラムです。



海外の学生も
地元の方とすぐに
打ち解けます



グループワークで
じっくり課題に
向き合います



プログラムで
お世話になった方を
招き、感謝の気持ちを
伝えるパーティ

参加学生の声

東京で生まれ育った私にとって陸前高田での経験は、単に被災地の現状を見ることにとどまらず、日本が抱えている少子高齢化や都市部への人口流入の課題を自分ごととして捉える意識を醸成させてくれるものでした。さらに「人」と「人」がお互いを尊重し助け合うという人間の真髄を再認識することができました。講師として学校で働く現在、生徒たちに「自分で経験し考えることの大切さ」や「個性を認め合う必要性」を伝えています。今後も、助け合う社会の実現を目指す陸前高田イズムの継承者として歩み続けたいです。

異文化コミュニケーション学部 2017年度卒
樋口 拓也さん



ブランド米
「たかたのゆめ」の
収穫を体験



農業の復興の
シンボルをいかに
心を込めて
育てているか
知りました

地域の方の声

楽しかったあ〜と、いつも終わってから思う。店でお話するときは通訳を介しながら一方的になってしまうことが多いし、夕方からの交流・発表会に参加すると和やかな雰囲気の中でゲームや会話で盛り上がるが、如何せん時間が少ない。自分は接客業といっても海外の方と話をする機会がほとんどないから上達は望めないけど、次会うときは少しでも多く会話ができればと思っています。

カフェフードバーわいわい
太田 明成さん



陸前高田の美味しい
食事をいただいた後、
これまでの歩みと
現在の課題について
お話をうかがっています



気さくながら
気概にあふれる話に
学生たちはいつも
引き込まれます

地域課題に取り組む

Work on regional issues

異文化コミュニケーション学部 サービスラーニングC (イングリッシュ・キャンプ)

陸前高田市の中学生に英語漬けの体験をさせたいという陸前高田市教育長の熱い思いにこたえて、異文化コミュニケーション学部が開発したプログラムです。2019年に開始し、2020年から正課科目化されました。中学生を対象に、ゲームや歌といったアクティビティを通して、英語を使ったコミュニケーションの場を提供します。ゲームに熱中するうちに、生徒たちが英語での説明を理解するようになり、気づけば、海外出身の大学生相手に自分も英語で話している、そんな場を目指しています。



「英語でクイズ」の説明中



英語の歌をみんなで歌おう!



プログラムの合間、ラストの活動に向けて真剣な打合せ

立教サービスラーニング(RSL)

「立教サービスラーニング (Rikkyo Service Learning: RSL)」は、「世界・社会・隣人」と実際に交わりながら、社会の現場も「教室」として捉える、全学共通の新しい「学修」スタイルの科目群です。事前学習をしたのち、受入機関・団体(NPO、行政、企業等)の支援・指導の下、社会で生起するさまざまな課題を題材とした体験学習を行い、事前学習と体験学習を統合し学びを深める事後学習をおこないます。RSLでは2016年開始当初から陸前高田市等をフィールドとしたプログラムを実施しています。



現地の方との関わりをとおして、フィールドの課題に向き合います

他者と協働して課題に取り組むことにより学びを深めます



社会学部 ICT教育の実践によるコミュニティ支援

2018年に株式会社ウェブインパクトの寄附を受け社会学部が開始したプログラムです。学生は実践的で経験豊富なエンジニア講師陣から集中講義でICTの基本、AIの使い方を学んだ後、陸前高田へ赴き、自ら現地のニーズを確認します。それらをもとに陸前高田の中高校生を中心とした地元の人々と共に、ICTやAIを活用したコミュニティ支援を実践します。ICTやAIを学ぶだけでなく、そうした技術を人のために役立てるにはどのように利用すればよいのかを考え、実践するプログラムです。



活用方法を一緒に考えよう



陸前高田の魅力を紹介するよ

交流と学びの場を開く

Open a place for interaction and learning

2017年4月、陸前高田市の協力のもと、岩手大学と立教大学による交流活動拠点「陸前高田グローバルキャンパス（愛称：たかたのゆめキャンパス）」を開設し、同時に「立教大学陸前高田サテライト」を設置しました。陸前高田サテライトでは、陸前高田グローバルキャンパスが掲げる事業コンセプト「学びを通してつなぐ」、「学びを通してつたえる」、「学びを通してつくる」に接続しながら、【陸前高田市の皆さんと本学の学生・教職員が、共に考え学ぶことを通じて、復興の道を歩んでいく希望を共に見つけていく場所】として定着することを理念に様々な取り組みを展開しています。



陸前高田グローバルキャンパス 利用団体

- ・海外大学（ハーバード大学、プリンストン大学、スタンフォード大学、イリノイ州立大学など）
- ・国内大学（東京大学、東北大学、お茶の水女子大学、関西大学、明治学院大学、青山学院大学、東京農業大学、成蹊大学など）
- ・岩手大学
- ・立教大学
- ・地元NPO（マルゴト陸前高田、トナリノなど）
- ・行政機関（復興庁、陸前高田市）
- ・一般市民

RIKKYO と RIKUZENTAKATA の「R」。立教大学のスクールカラーで RIKKYO VISION 2024 のベクトルを、陸前高田の海をイメージしたカラーで陸前高田市のベクトルを表現し、立教大学と陸前高田市がともに考え、ともに歩みを進める様子を表しています。

岩手大学のスクールカラー、陸前高田の海をイメージしたカラー、立教大学のスクールカラーを組み合わせ、岩手大学と立教大学が陸前高田市で出会い、3者が重なり合っで陸前高田グローバルキャンパスを作り上げる様子を表しています。



教育

大学シンポジウム

東日本大震災発生後、陸前高田市をはじめとする被災地で、全国の大学が震災からの復旧・復興に向けて活動を行っています。陸前高田市やその周辺地域で行われてきた大学の取り組みを振り返り、大学関係者、陸前高田市や周辺の地域住民が共に理解することで、大学間、また、大学と地域住民の間に新たな繋がりが生まれ、それが復興を加速するエンジンとなることを目指して、2017年1月、2018年3月に開催しました。



活動成果の
ポスター
セッション



たかたの
未来を考える
ジャムセッション

春呼び祭

陸前高田グローバルキャンパスでは、陸前高田市を「大学生が絶え間なく訪れる交流のまちにする」という方針を掲げ、様々な事業を展開しています。この方針のもと、大学シンポジウムを引き継ぎ、陸前高田市を訪れた大学生や卒業生、地域住民との関係性がより深まり、顔と名前が分かるような間柄になることを目指して、2019年3月に全国の大学生、大学関係者と地域住民で作り上げたお祭りです。本学学生も企画や運営に関わり活躍しました。

岩大手と
立教生



想いを
寄せ書きに



よさこいで
笑顔と元気を

陸前高田サテライト 奨励金制度

2017年から「立教大学陸前高田サテライト利用に係る交通費及び宿泊費奨励金」制度を開始しました。本学の学生および大学院学生が陸前高田サテライトを積極的に利用できるよう、一定の条件を満たした場合に、交通費・宿泊費の一部を経済的に奨励しています。

利用学生数



462名

(2017～2019年度合計)

次世代型仮設住宅の設置

2020年2月、災害時に福祉避難所や応急仮設住宅として利用できる移動式木造住宅「ムービングハウス」を全国で初めて内覧・体験可能な形で設置し、関係者による1泊2日の体験型研修プログラムを試行しました。ムービングハウスは、平常時はホテルや研修施設等として利用し、災害時はトラックに貨物として載せて瞬時に移動させ、福祉避難所や仮設住宅として利用する「社会的備蓄」が可能な施設です。今後は、全国の自治体で防災を担当する職員向けの研修プログラムなども企画・実施する予定です。



全国で普及が進んでいます



天然木による暖かな内装

介護人材育成研修

2018年2月～3月、多様な介護予防・生活支援ニーズを要する高齢者に対して支援できる人材（暮らしささえ隊）を育成することを目的とした「介護人材育成研修業務」を陸前高田市から受託し、コミュニティ福祉学部が保健・医療・福祉・介護・地域づくりなどをテーマとする一連の研修プログラムの一部を開発・実施しました。本学は「福祉のまちづくり事例紹介」、「コミュニケーション技術と援助の倫理」、「陸前高田の福祉活動」などの科目を提供したほか、研修実施後の評価、検証、助言及び指導も担当しました。

立教たかた コミュニティ大学

陸前高田グローバルキャンパスの開設を記念して、立教大学のネットワークを駆使して展開した陸前高田市民向けの公開講座です。開設前の2017年2月に池上彰客員教授による講座を開講したほか、2017年度3回、2018年度5回、2019年度2回の講座を実施しました。
※講座名・講師等はP31を参照



立教生と共に受講

「記憶の継承について考えるー原爆体験の継承の現場から」(2018年7月)

東日本大震災津波伝承館の工事が進む2018年7月、震災の記憶をいかに継承するかをテーマに本学教員が原爆体験の継承に取り組む広島の高校生の事例を紹介、学生と地元住民でワークショップを実施しました。講座終了後、参加者から学生に声がかかり市内や職場を案内していただき、参加学生2名が同市をフィールドにゼミ論・卒論を執筆しました。

「パラスポーツ ゴールボール体験ー音の世界を体験してみよう」(2018年12月)

「ノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくり」に取り組む同市で、本学校友・ゴールボールパラ五輪金メダリストの若杉遥氏が講師となり、選手になるまでの経験の共有とゴールボール体験会を実施しました。見える人、見えない人が共に音の世界の新感覚スポーツを体験しました。



金メダリストにチャレンジ

「新しいモノサシSDGsで世界、地域を考えよう」(2019年2月)

2018年、同市がSDGs未来都市に選定されたのを受け、SDGsの発信活動に取り組むキャスターの国谷裕子氏によるSDGs講演会を開催しました。国谷氏にも復興状況を視察していただきました。



会場満席

学生の取り組み

Student efforts

東日本大震災復興支援団体 Frontiers

東日本大震災直後に現地支援に向かった立教生が2011年6月7日に結成しました。社会学部と協力しながら、2011年には学外の復興支援団体と連携し被災地域へ学生を繋ぐ窓口となり、2012年からは現地活動や新宿区避難者支援・地域活性化活動を開始しました。現地活動は「唐桑ツアー」という名称で、気仙沼市唐桑町と陸前高田市に足を運び続けています。「被災地」ではなく「唐桑」へ行く、「被災者」ではなく「〇〇さん」に会いに行くという感覚の変化や、「来てくれるだけでいい」という地域の人びとの言葉に、本当に行くだけでいいのか、行き続けることの意味とは何かという疑問に向き合い、地域の人びとに打ち明け、共に考え悩みながら、それでもこの場所や人びとに魅了され、訪れ続けています。



唐桑の民宿
つなかんにて
元気はじける
女将さん達と♪



“出張カエル塾”
本番前…!

東日本大震災復興支援団体 Three-S

震災発生当時の学生ボランティア不足に際し、“何かしたい”特別な技術や知識のない学生を被災地へとつなげるべく、立教大学内に学生による復興支援の拠点が必要と考え、2011年6月7日に学生5名により設立されました。MISSIONは「『“何かしたい”を“何か出来る”へ』をモットーに、1人ではなかなか1歩を踏み出せない学生の想いを、みんなで、学内で、都内で、現地で…など様々な活動を通し復興を応援すること、そして「風化防止と伝える活動」。学園祭での石巻やきそば販売等による啓発活動、石巻・女川交流プログラム等の現地活動、新宿区社会福祉協議会や他大学の学生と連携した新宿区避難者支援・地域活性化活動、広報活動、防災啓発活動等を行ってきました。



お世話になって
いる石巻茶色い
焼きそばアカデ
ミー監修のもと
販売しました



気仙沼
合宿にて

学園祭にて写真展を
開催！来場者と震災
や防災についてお話
をし、復興の現状や
学生の取り組みを共
有しました



東日本大震災 復興支援交流 スペース

本学学生が取り組む様々な復興支援活動の相互連携を促進するとともに、学生が新たに活動を始めるきっかけとなる情報や機会を提供することを目的に、2013年7月から2016年3月まで池袋キャンパス5号館1階に「東日本大震災復興支援スペース」を開設しました。復興支援活動に関わる学生が集い、交流会、写真展、説明会等の様々なイベントを開催する場として活用されました。



授業の合間にも
学生が集まり
ました

講演会「震災と交流空間～気仙沼市唐桑町

『カエル塾』が育んできたもの」

—出張カエル塾—東北唐桑出身の「不良」国昭さんが震災をきっかけに旅人の子もたちと震友になった話
唐桑町で学生ボランティアらが集う「カエル塾」を学生たちが再現し、主宰者をお招きして講演会を開催しました。



満員御礼



カエル塾の
壁面や小物を
再現

メッセージ

東日本大震災から10年。

あの日、我々陸前高田市民は、絶望の淵にいました。

誰かに支えてもらいたい。誰かに寄り添ってもらいたい。

そんな時に以前から交流のあった立教大学の皆様に声を掛けていただきました。

2012年5月23日に連携・交流協定を結ばせていただき、映像ビデオ「Rのことば」を制作していただいたのがつい先日のごとくのように思い出されます。

立教大学からの支援は多岐にわたり、がれき片付けなどの災害ボランティアのほか、被災者に対する傾聴ボランティアや、野球教室の開催、東京芸術劇場で開催された「つながる。陸前高田と立教大学」交流展など、立教大学らしい寄り添い方をしていただきました。

学生の皆様をはじめ、立教大学関係者の方々の優しさに触れ、大きな力、勇気をもたらした市民もたくさんいたはずです。

現在は、陸前高田グローバルキャンパスにおいて海外の方々との交流や専門的な研修なども行われ、陸前高田市の明るい未来を一緒に模索して頂けるパートナーとしての活動が続いています。

コロナ禍にあって、地方の可能性に注目が集まる今、立教大学の皆さんとの更なる連携強化は大学と地方自治体の代表的な連携モデルになるものと考えており、今後の展開にも大いに期待をしているところです。

結びに、これまでのご支援と友情に心からの感謝を申し上げますとともに、立教大学の益々のご発展をご祈念申し上げメッセージといたします。

陸前高田市長 戸羽 太



あれから10年という月日が過ぎました。

立教大学と陸前高田市のみなさんとの交流は、2003年から陸前高田市生出地区で続いていた「林業体験プログラム」が土台となりました。震災時、市が「壊滅的被害」というテレビから流れる言葉に、想像力が全く追いついていきませんでした。しかし、震災後、初めて陸前高田に行き、元陸前高田駅前に立ったとき、あの強烈な匂いと目の前に広がる戦場跡のような風景に言葉を失いました。

市民の生活と思い出が染み込んだがれきの撤去から支援活動が開始されました。オール立教の名の下に、大学はもちろんですが、小・中・高校、校友など支援の輪も広がっていきました。陸前高田の方々是谁が行っても「立教さん」と親しみを込めて呼んで下さいました。

学内制度として、「災害ボランティア援助金規程」（現「被災地支援ボランティア援助金規程」）により支援活動をする学生を経済的に支える制度を創設し、多くの学生が現地に足を運びました。震災から6年が経過し多くの大学・団体が撤退していく中、2017年4月に陸前高田市協力のもと岩手大学と共に研究教育交流拠点として「陸前高田グローバルキャンパス」を開設、同時に「立教大学陸前高田サテライト」を設立し、現在でも様々な活動を展開しています。

直接活動を担って下さった教職員の皆さん、若い力を発揮してくれた学生のみなさん、そしてこの活動を支えて下さった方々に、この場をお借りして御礼申し上げます。

10年はひとつの区切りですが、陸前高田市と立教大学の関係は今後も人と形を変え続けていくことでしょう。それぞれの人生において大きなインパクトを持つ負の体験を、交流・教育・研究・生活の中でプラスに変換できる関係が、今後も継続されることを願って止みません。

立教大学東日本大震災及び災害対策・支援本部長
立教大学陸前高田サテライト長 松山 真



2011

- 3月11日
 - 災害対策本部設置
 - 帰宅困難者の受け入れ
- 4月
 - ヤコブ文庫による学生への図書贈呈
 - 「東日本大震災に伴う立教大学復興支援活動指針」策定
- 5月
 - 陸前高田「炭の家」での高齢者介護ボランティア

- 6月
 - 陸前高田市を重点支援地域に指定
- 11月
 - 郡山ベージュ隊
- 12月
 - 勤務員ボランティア休暇制度制定

- 2月
 - 図書館再生支援ボランティア
- 3月
 - 陸前高田市追悼式への参加
- 5月
 - 立教大学復興支援ネットワーク会議始動
 - 「陸前高田市と立教大学との連携及び交流に関する協定」締結
- 8月
 - 釜石市復興ボランティアおよび、釜石シーウェイブスや地元中学生との交流

2012

- 広田町仮設住宅での盆踊り大会
- 11月
 - 図書館施設備品の寄贈
 - 英語ワークショップ 陸前高田 英語ボランティア by Small Group Communication有志
- 12月
 - 戸羽太陸前高田市市長が本学を訪問。東京芸術劇場にて講演会

2013

- 2月
 - 陸前高田市広田地区仮設住宅における傾聴ボランティア
- 3月
 - 陸前高田市追悼式への参加
- 6月
 - 陸前高田市立（仮設）図書館への書架寄贈
- 7月
 - 協定締結一周年 総長、復興支援本部長ら陸前高田市を訪問

- 12月
 - 戸羽太陸前高田市市長が本学を訪問。東京芸術劇場にて講演会

2014

- 2月
 - 復興支援プロジェクト/東北巡礼キャラバン隊 ～よりそうための3日間～
- 3月
 - 陸前高田市追悼式への参加
- 5月
 - ワークショップ演習C：山元町訪問ボランティア活動

2015

- 3月
 - 陸前高田市追悼式への参加
- 10月
 - 「RIKKYO VISION 2024」で陸前高田市にキャンパス開設を標榜

2016

- 1月
 - 陸前高田市・岩手大学・立教大学「地域創生・人材育成等の推進に関する相互協力及び連携協定」締結
- 3月
 - 陸前高田市追悼式への参加

2017

- 2月
 - 立教大学陸前高田サテライト及び陸前高田グローバルキャンパス開設記念公開講演会・池上彰氏「グローバル社会を生きる」開催
- 3月
 - 陸前高田市追悼式への参加
- 4月
 - 陸前高田市立第一中学校（当時）が本学にて感謝の合唱コンサート開催

2018

- 3月
 - 岩手県陸前高田市総合交流センター開設記念イベント 第14回 東京六大学バスケットボールリーグ戦 陸前高田大会
 - 陸前高田市追悼式への参加
- 9月
 - 陸前高田市まぢびらき記念式典出席
 - 陸前高田市立高田第一中学校が本学にて感謝の合唱コンサート開催

2019

- 3月
 - 陸前高田グローバルキャンパス春呼び祭開催
 - 陸前高田市追悼式への参加
- 9月
 - 立教大学陸前高田サテライトが東北みらい賞受賞

3月11日 東日本大震災発生

- 4月 ● コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援プロジェクト（～2021年3月）
- 4月 ● 立教大学東日本大震災復興支援本部（2018年3月から東日本大震災及び災害対策・支援本部）
- 5月 ● 社会学部東日本大震災 RDY（立教生ができることをやろう）プロジェクト
- 5月 ● 立教大学学術推進特別重点資金（立教 SFR）東日本大震災・復興支援関連研究の募集（～2017年度）
- 6月 ● 東日本大震災復興支援団体 Frontiers
- 6月 ● 東日本大震災復興支援団体 Three-S
- 8月 ● 陸前高田支援ボランティア（2015年は陸前高田スタディキャンプ）（～2015年8月）
- 12月 ● 職員ボランティア（2014年11月から新入職員研修〈2年目〉陸前高田に赴く）
- 12月 ● 子ども支援ボランティア（～2012年8月）
- 12月 ● 災害ボランティア援助金規程制定（2017年6月から被災地支援ボランティア援助金規程）
- 5月 ● 映像ビデオ『Rのことば』制作（～2013年3月）
- 7月 ● 立教野球教室@陸前高田
- 9月 ● 震災のフィールドワーク（生活支援・ライフストーリー・プロジェクト）（2017年）
- 11月 ● 郡山プロジェクト（2015年10月から「福島の子どもの笑顔をつなぐ」隊、2019年11月から福島訪問）
- 12月 ● 「つながる。陸前高田と立教大学」交流展 ～東日本大震災を忘れないために（～2016年12月）
- 5月 ● 「つながる。陸前高田と立教大学」交流展 学内パネル展示（～2016年7月）
- 6月 ● 陸前高田スタディツアー（～2017年12月）
- 7月 ● 復興支援交流スペース（～2019年3月）@陸前高田
- 8月 ● 立教バレーボール教室
- 10月 ● 「つながる。陸前高田と立教大学」交流展 ホームカミングデー・パネル展（～2015年12月）

年から自主講座と社会学部東日本大震災 RDYプロジェクトに引き継がれる

くり」隊、2019年11月から福島訪問

忘れないために（～2016年12月）

交流展 学内パネル展示（～2016年7月）

年12月）

2019年3月）

@陸前高田

陸前高田と立教大学」交流展 ホームカミングデー・パネル展（～2015年12月）

2月 ● 陸前高田プロジェクト

11月 ● たかたのゆめフェア（陸前高田市ブランド米の学食販売）（～2017年12月）

4月 ● 立教サービ斯拉ーニング（RSL）

1月 ● 陸前高田グローバルキャンパス大学シンポジウム（～2018年3月）

4月 ● 陸前高田グローバルキャンパス開設

6月 ● 陸前高田サテライト利用に係る交通費及び宿泊費援助金規程

11月 ● 立教たかたコミュニティ大学（～2019年12月）

12月 ● みんなでわいわいクリスマス

8月 ● ICT教育の実践によるコミュニティ支援（～2020年度）

7月 ● サービ斯拉ーニングC（イングリッシュ・キャンプ）

2020

- 2月
 - 陸前高田グローバルキャンパスに次世代型仮設住宅ムービングハウス設置

活動の歩み



東日本大震災関連の取り組み（原則、講演会、シンポジウム等を除く）

● 単発の活動 ● 現在も継続中の活動 ● 現在は終了している、または終了予定のある活動

データ

プログラム
実施回数



514回
(2011～2019年度合計)

プログラム
参加学生数



5,022名
(2011～2019年度合計)

プログラム
参加教職員数



1,269名
(2011～2019年度合計)

立教たかた
コミュニティ大学
来場者数



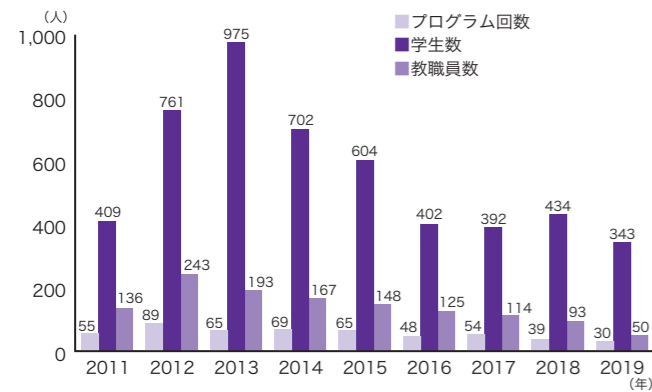
756名
(2017～2019年度合計)

陸前高田
グローバルキャンパス
利用者数



18,537名
(2017～2020年度合計)

プログラムの実施回数、参加学生数、教職員数



※新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため
2020年3月以降はプログラムを中止しています。



地域ごと訪問学生数、教職員数 (2011～2019年度。上位10か所)

順位	地域	学生数の合計	教職員数の合計
1	陸前高田市	1,974	526
2	気仙沼市	1,163	363
3	石巻市	311	100
4	いわき市	306	102
5	大槌町	236	23
6	南三陸町	151	63
7	会津若松市	130	10
8	郡山市	118	8
9	女川町	117	6
10	仙台市	77	2
10	新地町	77	2

陸前高田グローバルキャンパス利用実績 (2017年4月～2020年11月)

(1) レンタルスペース	2017		2018		2019		2020	
	利用者数	利用件数	利用者数	利用件数	利用者数	利用件数	利用者数	利用件数
市民、市民団体	1,708	137	1,272	174	1,300	183	169	33
立教・岩大・陸前高田市	1,637	76	3,357	102	2,169	110	87	14
一般	1,222	57	1,187	81	847	106	104	39
賛助会員	80	7	21	1	0	0	0	0
合計①	4,647	277	5,837	358	4,316	399	360	86

(2) ラウンジ利用者&見学者	2017		2018		2019		2020	
	利用者数	利用件数	利用者数	利用件数	利用者数	利用件数	利用者数	利用件数
ラウンジ利用者	845	—	745	—	869	—	461	—
見学者	340	—	86	—	31	—	0	—
合計②	1,185	—	831	—	900	—	461	—
①+②	5,832	—	6,668	—	5,216	—	821	—

立教たかたコミュニティ大学講座一覧

年度	開催日	タイトル	講師等 (敬称略)
2017年度	2017年11月18日	戸口純と仲間たち たかたの夢ピアノ・コンサート	戸口純 (ピアノ、立教大学法学部卒業)、川本悠自 (ベース)、小松伸之 (ドラムズ)
	2017年12月16日	宮沢賢治で社会学しよう!	筒井久美子 (立教大学大学院社会学研究科博士課程後期課程満期退学)
	2018年1月21日	高田から世界を考える ～難民の世紀に生きる私たち～	長有紀枝 (立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授、国際NGO「AAR Japan 難民を助ける会」理事長)、木山啓子 (国際NGO「JEN」代表理事、学校法人立教学院理事、立教大学法学部卒業)、気仙地区高校生4名、村上清 (元国連職員、岩手大学学長特別補佐、陸前高田市参与、陸前高田グローバルキャンパス運営機構役員)
2018年度	2018年5月20日	朗読×文学— (生きる) を考える	後藤隆基 (立教大学兼任講師)、堀田紀真 (朗読ネットワーク日本主宰、立教大学社会学部卒業)
	2018年7月29日	記憶の継承について考える — 原爆体験の継承の現場から	小倉康嗣 (立教大学社会学部准教授)
	2018年11月4日	正多角形をひし形で埋め尽くす!	青木昇 (立教大学理学部教授)、杉山健一 (立教大学理学部教授)
	2018年12月16日	パラスポーツ ゴールボール体験 ～首の世界を体験しよう	若杉遥 (ロンドンパラリンピックゴールボール金メダリスト、立教大学社会学部卒業)、江黒直樹 (元全日本女子ゴールボールチームヘッドコーチ)
2019年度	2019年2月23日	新しいモノサシSDGsで世界、 地域を考えよう	国谷裕子 (東京藝術大学理事、慶応義塾大学特任教授、キャスター)
	2019年9月7日	LED『ペットボトル』で イルミネーションを作ろう!	深作操 (サンケン電気株式会社 管理本部 CSR室担当部長)、伊藤真一 (サンケン電気株式会社 管理本部 CSR室 CSR推進課長)、舩谷鋭 (立教大学観光学部教授)
	2019年12月14日	スポーツを通じたまちづくり・ひとづくり	大倉智 (株式会社ドーム取締役執行役員、株式会社いわきスポーツクラブ代表取締役兼総監督)

陸前高田市内におけるその他の講座一覧

年度	開催日	タイトル	講師等 (敬称略)
2017年度	2017年2月25日	立教大学陸前高田サテライト及び陸前高田グローバルキャンパス開設記念公開講演会「グローバル社会を生きる」	池上彰 (立教大学客員教授・ジャーナリスト)
	2017年7月3日	農を通して食と健康を考える ワークショップ	渡部宗雄 (上和田有機米生産組合組合長)、菊地良一 (上和田有機米生産組合初代組合長、現顧問)
	2017年12月16日	パソコン作り教室	松田優一 (PCN プログラミングクラブネットワーク代表)